

日米医学医療交流財団 留学助成

A 項 研修報告書 (2009 年度 助成者)

作成日 2010 年 10 月 12 日

氏 名	長岡 武彦
研修先機関名	St. Vincent's Hospital Melbourne (SVHM)
研 修 期 間	2009 年 9 月～2010 年 8 月
現在所属機関名	帝京大学医学部附属病院
分 野	麻酔科
役 職	助手
	<p>2009 年 9 月より 1 年間所属する帝京大学麻酔科の森田茂穂主任教授と、メルボルン・St. Vincent's 病院(SVHM)麻酔科の Assoc Prof. Michael Davies の厚意により、麻酔科の visiting clinical fellow として臨床留学をさせていただきました。家賃補助などない完全無給というポジションであったため、JANAMEF の助成金は非常に有り難いものでした。SVHM はメルボルンの中心街に隣接した場所にあり、麻酔科医約 60 名が在籍し、そのうち半数弱が非常勤コンサルタントで、1/4 が常勤コンサルタント、残り 1/4 がレジストラ(麻酔研修医。トレーニング期間は 5 年)という公立病院です。手術室は麻酔室とセットになっており、12 室で、一日 30 件強の手術件数があり、それ以外に ECT や内視鏡室での鎮静(年間約 2700 件)といった仕事も入り、年間麻酔管理件数としては、約 14000 件です。</p> <p>勤務形態は週 5 日間通常勤務(手術室のみ)し、土日は休み、当直なし、という素晴らしい研修でした。スケジュールは午前・午後で区切られており、それぞれ前もって割り当てられた科の麻酔を行います。例えば、月曜日は午前中に経食道エコー(TOE: TransOesophageal Echocardiography。米語だと TEE: TransEsophageal Echocardiography です)、午後は ESWL(体外衝撃波結石破碎術)、火曜日は心臓外科と整形外科、水曜日は終日脳神経外科、木曜日は一般外科と整形外科、金曜日は整形外科もしくは TOE で午後はオフ、といった形でした。ローテーションは数カ月毎に変わっていきます。僕が 1 年間で経験した麻酔件数は約 650 件でした。</p> <p>僕のこちらの病院での研修の目的は、先ず末梢神経ブロックのトレーニング、次に経食道エコーのトレーニング、そして英語を使用する環境の中で仕事をして英語を習得すること、の 3 つでした。</p> <p>末梢神経ブロックに関しては、日本でもエコー装置の普及によりここ数年かなりポピュラーになってきていますが、SVHM では昔から神経ブロック併用の麻酔を施行しており、神経ブロックのトレーニング施設としても人気があります。この神経ブロックを併用するスタイルはオーストラリアの中でも特殊なようで、他のメルボルンの病院ではあまり神経ブロックは行われていないとのことでした。これは、トップの Michael Davies の個人的な好みによるところと、Public であるということが関係しているものと思われます。どのぐらい一般的かというと、現在の日本で硬膜外麻酔を行うのと同じような感覚で末梢神経ブロックを併用していました。例えば、術後の抗凝固療法のこともあり、整形外科の下肢手術では殆ど硬膜外麻酔は施行されず(以前は頻用されていたようですが)、そのかわりに大腿神経ブロックや坐骨神経ブロックを施行し、脊椎麻酔もしくは全身麻酔を併用していました。上肢の手術は基本的には腕神経叢ブロック+鎮静といった感じでした。そのため、神経ブロックができることは必須とみなされており、コンサルタントによってやり方も違うので非常に勉強になりました。アングロサクソンの方々は器用ではないという先入観があったのですが、かなり手技的にうまいコンサルタントの方もいて、学ぶものが多かったです。また、神経ブロックを施行した患者さんについて、効果や合併症の有無(短期・長期とも)についてきちんとフォローアップする体制が作り上げられていて、フィードバックも得られ、しかもそれでデータを集めてスタディにも活用できるような一石二鳥のシステムになっておりました。</p> <p>経食道エコーに関しては、こちらの病院では心臓手術麻酔は二人のコンサルタントが担当し、一人は</p>

麻酔担当、もう一人は TOE+心筋保護液灌流担当という形になっており(何があったのか知りませんが昔からこのスタイルだそうで、他の病院はでは違うそうです)、ゆっくりエコー鑑賞ができ、系統だって教えてくれるため非常に勉強になりました。心臓麻酔と TOE 合わせて 150 件ほどのケースを経験できました。

一般の麻酔に関しては、Visiting fellow という立場上、なかなか自分の思いどおりに(好き勝手に)麻酔をかけることはできなかったので、それが少しストレスフルではありましたが、Awake Craniotomy や大動脈・大動脈弁のステント手術など自分の所属していた病院では経験しなかったケースも経験でき、また肥満患者の麻酔のトレーニングにもなり(100kg オーバーは当たり前、120kg も珍しくないという感じでした)、違う考え方、違うやり方を学べ、今後の糧になると感じました。

肝腎の英語に関しては、それなりに準備をしてみたものの、やはり悩まされることも多かったです。もちろん手術室では患者さんも早々に寝てしまいますので、なかなか多大なコミュニケーションを取るのには難しいですし、手術中外科医に突然話しかけられることもあるのですが、これはすべて聞き取れなくてもあまり問題になりません。たいてい台を上げたり下げたり斜めにしたりすれば OK です。手術室で一番怖かったのは手術室の壁に設置してある電話が鳴った時でした。麻酔科医が一番近くにいるので出なければならず、電話の相手はまさか英語が不得手な日本人が電話にでるとは思っていないのでノーマルなスピードで話してくるわけで、もちろん相手の姿・ジェスチャーなど見えず、当初は早口でまくしたてられると全く聞き取れませんでした。もちろん徐々に慣れてはいったのですが…。オーストラリアに渡った当初は 1 年いてネイティブと互角に渡り合えるようになれば、などという甘い幻想を抱いていましたがやはりなかなか難しかったです。1 対 1 で話しているときは向こうもクリアに話してくれているのもあってなんとかなるのですが、バックグラウンドがないことや、発音の違いもあり(もちろん日本語と英語です…(笑))、ネイティブが 2,3 人で話しているところに簡単に jump in できるようになるには至りませんでした。

最後にメルボルンでの生活についてですが、これは非常に快適でした。メルボルンは自然が多くきれいな街で、とても暮らしやすく、移民が多い土地柄のせいか食事も思ったよりも格段においしかったです。自らの名誉のために言っておきますが、僕は日本で決して惨めな食事をしていただけではありません(と思います)。正直こちらに来るまでは、アメリカやイギリスのようなどうしてここまで不味く作れるのか、という料理に出会うのだらうと思っていましたが、いい方に予想は覆されました。景気がいいせいか、100 円ショップ(1 ドルショップ?)なるものがなかったせいか、物価は日本に比べて高いように感じましたが、労働環境は非常に良いようで、短い労働時間で高い賃金を得て(麻酔科医はその際たるものです)、非常にリラックスした生活を送っており、羨ましく感じました。いつでも好きなように休みが取れ、夏休みに至っては 1 ヶ月が基本です。金曜日の午後になると仕事そっちのけでビールを飲み始める職場もあるようです。また、日本では手が届かなかったゴルフも、メルボルンではすぐそこにありました。ゴルフ場は市内から車で 5-15 分圏内にたくさんありますし、18 ホールで 2000 円ちょっと、とゴルフ好きにはパラダイスでした。

振り返ると、1 年では英語ができるようにならないと痛感したこと以外は、充実した研修であったと思います。またプライベートでは多数の友人もでき、楽しい 1 年を過ごすことができました。短期間ではありますが海外に身を置くことで今までとは違った視点で自分のことや仕事のこと、日本のことを見つめることができ、非常に有意義な留学経験であったと思います。助成をしていただいた JANAMEF の皆様には心から感謝しております。